從生態批評觀點論述日本原發文學
—以 3·11 為分界論述描繪未來圖像之經典作「鄰家風車」
與「不死之島」—

曾 秋桂

淡江大學日本語文學系 教授

摘 要

探究 3·11(2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分發生於日本東北地區之「東日本大震災」之簡稱)的發生而使得日本文學的風貌產生如何的改變時，當然 3·11 之前也須被關注到，然而特別是 3·11 之後長年建立起核能發電的「安全神話」，一夕間摧毀。鑑此從生態、環境之外，各領域也紛紛展開該相關課題的研究。在此趨勢之下、也常見以「原發」為主題創作的原發文學作品的問世。

本論文使用常被當作文學·文化批評理論·方法論沿用之生態批評為依據、主要考察描繪未來圖像之豐田有恒「鄰家風車」(1985)與多和田葉子「不死之島」(2012)兩部經典之作，主要聚焦於與生態·環境間的關係，而釐清了文學作家對原發課題的高度關心與實踐原發文學創作的心路歷程。

考察結果顯示：「鄰家風車」(1985)與多和田葉子「不死之島」(2012)，形成左右對照鏡般的有趣現象。同時閱讀對比此兩部作品，發現雖然生活在無所匱乏現代文明的社會中，然而勢必正視能源政策的問題，沉著冷靜地抉擇未來的時刻到來。同時不是在「反原發」·「放棄原發」，或者「支持原發」當中做選擇，要以更嚴肅的態度來思考來面對能源政策問題。

關鍵字：生態批評 3·11 危機 反對原發 支持原發

受理日期：2014.09.01

通過日期：2014.10.24

**Japanese nuclear power plant literature read from
eco-criticism:At the center of "Tonari no fusha" and "Fushi
no shima" which is bordering on 3 • 11**

Tseng Chiu-kuei

Professor, Department of Japanese, Tamkang University

Abstract

By 3 • 11 (abbreviated name of the Great East Japan Earthquake which happened in the Japanese Tohoku district at 14:46 on March 11, 2011), the "safety myth" of a nuclear power plant collapses completely and people asks for new Paradigm in ecology, environment and various domains. The nuclear power plant literary works which have created the "nuclear power plant" to the literary theme is also often seen in such opportunity.

In this paper, "Fushi no shima" (2012) by Yoko Tawada and "Tonari no fusha" (1985) by Aritsune Toyota which the common feature of drawing a future image is regarded from the viewpoint of eco-criticism about the literature of such post 3 • 11 are chosen as the text examples. And this research has studied relationship with ecology and environment, and has carried out to following a writer's literary concern and the locus of practice around the nuclear power plant.

As a result of considering, "Fushi no shima" and "Tonari no fusha" are contrastive. The necessity that the modern society which enjoys the benefit of civilization faces an energy policy problem squarely, and makes decision calmly emerges. Simultaneously, people should cope with the energy policy problem more clearly, without catching "anti-nuclear power plant" - "nuclear power phase-out" or "nuclear power plant support" in an alternative attitude as which is opposed to each other.

Keywords:eco-criticism, 3 • 11, risk, anti-nuclear power plant,
nuclear power plant support

エコクリティシズムから読む日本原発文学 —3・11を境に見る未来像を描いた「隣の風車」と 「不死の島」を中心に—

曾 秋桂

淡江大学日本語文学科 教授

要 旨

3・11(2011年3月11日14時46分に日本東北地方で起こった東日本大震災の略称)によって原発の「安全神話」が完全に崩れ、生態、環境をはじめ、様々な領域で新しいパラダイムが求められている。そうした機運の中、「原発」を主題に創作した原発文学作品もしばしば見られる。

本論文では、そうしたポスト3・11の文学について、エコクリティシズムの視点で、作品事例として、未来像を描く共通点が見られる豊田有恒の「隣の風車」(1985)と多和田葉子の「不死の島」(2012)をテキストに選んだ。そして、生態・環境との関係性を究明し、原発をめぐる作家の文学的関心と実践の軌跡を辿ることにした。

考察した結果、「隣の風車」と「不死の島」は対照的で、文明の恩恵を享受する現代社会がエネルギー政策問題を直視して冷静に決断を下す必要性が浮かび上がる。と同時に、「反原発」・「脱原発」、あるいは「原発支持」を二者択一的態度で捉えずに、より明確にエネルギー政策問題に対処すべきことが示唆されている。

キーワード: エコクリティシズム 3・11 リスク 反原発 原発支持

エコクリティシズムから読む日本原発文学 —3・11を境に見る未来像を描いた「隣りの風車」と 「不死の島」を中心に—

曾 秋桂

淡江大学日本語文学科 教授

1. はじめに

2011年3月11日(金)14時46分に日本東北地方に「東日本大震災」(3・11と通称する)が起きて以来、3周年を迎える前の2014年の2月22日に、高濃度の汚染水100トンが溢れ出した問題がまた報道された¹。「社会分析の分野で、二十世紀末においては最も影響力のあったヨーロッパの著作の一つ」²と視されたウルリヒ・ベックの『危険社会—新しい近代への道』では、「危険として捉えているものはまずなによりも、直接は人間が知覚できない放射能」³と指摘し、「原子力時代の危険の脅威によって人類史上顕著な衝撃を被った。そして、この危険の脅迫によって(中略)国籍、空間、時間という概念が従来の意味を失ってしまったのである」⁴と言い、放射線と言った「新しいタイプの危険は多くの場合人間の知覚能力では直接には全く認識できな」⁵く、「子孫の代になってその弊害が顕著となる場合もある」⁶ことを特徴とする。ウルリヒ・ベックの論説を参考にすれば、核エネルギーがもたらす危険・事故は、いずれも地球全体の生態環境・人類に想像を遙かに超えた過大な影響を与えるに相違ない。

生態・環境と言えば、特に生態・自然環境と人間との関係を主題とする創作として、ノンフィクションやエッセイを指す「ネイチャ

¹<http://www.asahi.com/articles/ASG2P625TG2PULBJ00Q.html>「朝日新聞デジタル」(2014年3月1日閲覧)

²ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳(2011・初1998)『危険社会新しい近代への道』法政大学出版局 P462

³前掲ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳書 P28

⁴前掲ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳書 P3

⁵前掲ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳書 P35

⁶前掲ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳書 P35

ーライティング」(nature-writing)がある。従来の文学ジャンルの自然・環境に関わる小説、詩、演劇などを含め、大学の科目としても設置されている「環境文学」(environmental literature)⁷を範疇に入れて、環境問題の顕在化を背景に、研究対象を広げて言う「ネイチャーライティング」(nature-writing プラス environmental literature)が現代社会では普遍化されつつある。そうした中で、関心を人間社会に限らず、人間を囲む外の生態環境・自然との関係に寄せる研究・批評活動は、「エコクリティシズム」(ecocriticism)と呼ばれ、環境問題への危機意識に基づき、1990年以後から発展した文学・文化の批評理論であり、方法論の一つでもある⁸。

3・11によって生じた日本文学の変貌を追究する場合には、3・11以前は勿論、特にポスト3・11、長年築いてきた原発の「安全神話」が完全に崩れ、生態、環境をはじめ、様々な領域で新しいパラタイムが求められている。そうした機運の中、「原発」を主題に創作した原発文学作品もしばしば見られる。本論文では、文学・文化の批評理論・方法論の一つとされたエコクリティシズムの視点で、作品事例として、未来像を描く共通点が見られる豊田有恒の「隣りの風車」(1985)⁹と多和田葉子の「不死の島」(2012)¹⁰をテキストに、生態・環境との関係性を究明し、原発をめぐる作家の文学的関心と実践の軌跡を辿ることにしたのである。

2. エコロジーとエコクリティシズム

具体的な作品分析に入る前に、まず、エコロジーの由来、エコクリティシズムの定義と、文学・文化の批評への援用について説明しよう。

⁷加藤貞通(2007)「環境文学入門：自然とのコミュニケーションを回復する」『メディアと文化』第3号 P107

⁸浅井千晶(2010)「『崖の上のポニョ』—海辺の生命の物語—」『千里金蘭大学紀要』7号 P80

⁹ポスト3・11に刊行した『日本原発小説集』(柿谷浩一編 2011.10 水声社)の中に収録された作品の1つである。

¹⁰ポスト3・11に刊行した『それでも三月は、また』(鈴木哲発行 2012.2 講談社)の中に収録された作品の1つである。

2.1 エコロジー・生態学(ecology)の由来

多田満の論説¹¹では、エコロジーは、ギリシャ語 oikos (家) と logos (ロゴス) から合成された 19 世紀の造語という。元来のエコロジーは、生物と生物の関係、生物とそれを取り巻く無機的環境との関係を研究する生物学の一分野であり、生物の進化を研究していた E・ヘッケル (Ernst Haeckel) が 1866 年にエコロジー (生態学) を「生物の家計 (個体や生物群の間の物質やエネルギーのやりとり) に関する科学」と定義したそうである。日本語の「生態学」は、1895 年に三好学が初めて用いたが、現代では「人間が健康であるためには、生態系が健全でなくてはならない」という考え方において、E・S・リチャーズ (Ellen Swallow Richards) に始まり、A・レオポルド (Aldo Leopold)、R・カーソン (Rachel Carson) 等の活躍によって、「健康で幸福な生活と環境の学際的科学」として広まった人間生態学 (human ecology) とその系譜に位置づけることができる。エコロジー観が一般化した背景には、急激かつ過度な人間活動の広がりによって引き起こされた生態系の危機 (化学物質汚染、地球温暖化、森林破壊・砂漠化、種の絶滅、その他の地球規模での環境問題) があるという。

2.2 エコクリティシズムの定義

エコロジー・生態学 (ecology) の概念に由来するエコクリティシズム・環境批評 (ecocriticism・environmental criticism) は、批評理論・方法論として成立した。巴山岳人の論説¹²では、「エコクリティシズム (ecocriticism)」とは、20 世紀後半における地球環境の破壊に対する危機意識を背景に形成され、生態学における諸概念や哲学などに見られるエコロジカルな思想を取り入れた文学批評のジャンルである。環境破壊の拡大に対し、文学の分野から積極的に関わ

¹¹多田満の論説は、<http://www.asle-japan.org/環境文学用語集/エコロジー-生態学-ecology/>による。(2014 年 3 月 30 日閲覧)

¹²巴山岳人の論説は、<http://www.asle-japan.org/環境文学用語集/エコクリティシズム-環境批評-ecocriticism-environmental-criticism/>による。(2014 年 3 月 30 日閲覧)

っていくという姿勢、そして文学作品やその研究が環境問題の考察に非常に貢献するという意識がその特徴として挙げられる。「環境批評(environmental criticism)」とは、2005年にL・ビュエル(Lawrence Buell) がエコクリティシズムに代わる名称として提唱したもので、従来の「(原生) 自然」に重きを置いた研究の範囲を拡大し、社会における種々のイデオロギーや制度とも交錯するハイブリッドな領域としての「環境」を射程に入れることを意図とされている。しかしながら、現在でも「エコクリティシズム」がこの批評ジャンルを示す名称として一般的に使用されているという。

2.3 エコクリティシズムの援用

エコクリティシズム・環境批評(Ecocriticism)は、松岡幸司の説¹³では、文学作品を生態学的スタンスで捉える研究手法として、1980年代からアメリカを中心に発展してきた、「自然」や「環境」を中心に据えた文学研究であるが、実際には文学作品全般の環境意識や自然の位相のみならず、エコロジー(思想)の立場から文化全域に及ぶ新しいパラダイムを提示する文化批評といえることができる。山里勝己は、視点を「ネイチャーライティング」と「エコクリティシズム」との発展に据え、「ネイチャーライティング」が80年代にすでに市民権を獲得していたとしても、「エコクリティシズム」という、いまやあたりまえのように使われる批評用語が抵抗なく受け入れられるようになったのは、アメリカ文学・環境学会の初代会長をつとめたスコット・スロヴィックに言わせれば、1990年代半ば頃のことであった¹⁴とした上で、その相違を「急速に拡大しつつあるジャンルを、われわれはいまネイチャーライティング(あるいは環境文学)と呼び、そのような文学を扱う方法をエコクリティシズムと呼ぶようになってきているのである」¹⁵とした。さらに、エコクリティシズ

¹³松岡幸司(2011)『『1842年7月8日日蝕』: 翻訳と解説—ネイチャーライティングとしてのシュティフター』『信州大学人文社会科学研究』4号 P143

¹⁴山里勝己(2005)「書評野田研一著『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社、2003年6月」『英文学研究』81号一般財団法人日本英文学会 P236

¹⁵前掲山里勝己論文 P238

ムの文学・文化の批評へ応用を、「テキストを緻密に読み解くことで斬新な結論に至り、さらには文学史的な洞察にまで深まるこのような手法はきわめて刺激的である。ここには詳細でたしかな分析から滲み出る知的な興奮が感じられる」¹⁶と高く評価した。それに先立って、野田研一は、エコクリティシズムの根幹については、「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移で、エコクリティシズムの領野とは、文学における人間中心批判の遂行、およびその結果としての環境中心主義の可能性を探る試み」¹⁷(下線部分は論者による。以下同様)と明示し、「人間中心主義の解体と環境中心主義は、とりもなおさず、縦走式的にかつ歴史的に仮構されてある、私たちの身体と感性と思考の本性を解き明かす莫大な作業」¹⁸と付け加えて説明している。それに対して、山里勝己は「とりもなおさずエコクリティシズムの根幹をなす考え方である。そしてこれは人間を対象とするあらゆる学問分野をも射程におさめるものである」¹⁹と認識している。

そこで、本論文は上述した先行論究を参照し、エコクリティシズムの根幹を為す「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移」、「人間中心主義の解体と環境中心主義」と言った、ポスト3・11、特に必要とされる環境中心主義の観点から、対象作品を以下に分析、比較対照していくことにする。

3. エコクリティシズムによる原発文学作品「隣りの風車」の分析

原発文学の1つである豊田有恒の「隣りの風車」は、1985年に書かれ、「坂口」(P35)を名とした第1人称で語った土曜日と日曜日の2日間の出来事作品である。作中では「一九八四年」(P36.41)を取り挙げて述べているだけでなく、その年をよく「十年前」(P30.36.39.41)と触れているため、作品の現時点を1984年から10

¹⁶前掲山里勝己論文 P238

¹⁷野田研一(2003)『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社 P201

¹⁸前掲野田研一論文 P203

¹⁹前掲山里勝己論文 P238

年先の1994年と想定してもよからう。そうすると、この作品は、1985年の発表時から見て、10年先の未来像を空想し、描いた作品になる。

3.1 作品の大筋、及び語り手とその家族

語り手の坂口は1994年の現時点で「四十代」(P38)のため、年齢を逆算すると、1954年前後に生まれたと推定される。「六時に起きて、自転車で二時間かけて会社へ通わなければならない。減給につぐ減給のうえ、ボーナス全面カットになっているが、それでも会社がつぶされずに残っているのが、まだまだといえる」(P30)という下級サラリーマンを勤め、「日に往復四十キロを走」(P30)り、通勤している。また、家族構成については、「小学校へ入学することになっている」(P29)息子正夫と、「電気のあった時代に育っている」(P30)長女里子、実名のないまま「ワイフ」(P28)とだけ呼ばれる妻の4人家族である。坂口家族は10年前に、「大都市に見切りをつけ」(P39)て、「巨大な原子力発電所の廃墟」(P39)があり、「漁獲量が多」(P44)く、「米も野菜も、人口に見合っただけは供給される」(P44)、「新興住宅」(P30)に引っ越してきた。その前に、「電力PR誌の仕事」(P37)をした時、「岡山県北部」(P37)のダム建設について現地インタビューしたことがあり、エネルギー政策に関する紛争の一部始終を知っている坂口は、自家用の「貧弱な一メートルの風車」(P32)が隣りの古川家が建てた「直径五メートルの大風車」(P32)に脅かされ、停電するたび、生活に不便さを蒙っている。原子発電所廃止後の、「あちこちに風車が立ち始め」(P41)、「風力発電」(P41)を頼りにする生活の中で、「生存権」(P42)と認められる「受風権」(P42)を坂口は古川家に交渉に行ったが、「首を絞められ、三和土に叩きつけられた」(P42)。そこで、夫の帰りが遅いことを案じた坂口の妻が、近所を呼びかけて古川家へ抗議に行ったところ、丁度坂口が帰ってきた。混乱に巻き込まれている中、坂口の妻の胸は古川家の「四十年輩の角刈りの男」(P35)に「発砲」(P46)され、血まみれとなってしまった。

3.2 「今」までに辿り着いた日本の社会—「反原発」への批判

作品中の「今」の日本の社会を一言で言えば、エネルギー政策を

原子力発電から風力発電へと切り替えられた 10 年後のことである。

「一九八四年の大オイル・パニックの後、日本経済は急坂を転げ落ちるように、落ち込んでしまった」(P36)。「第二次オイル・パニックで、日本は石油の息の根を完全に止められた。輸入量の十分の一になったのだから、よほどの特権でもない限り、ガソリンは手に入らな」(P43)く、「東京、大阪では、人々は野獣と化し、ガソリンスタンド襲撃から始まり、食料、生活必需品の掠奪にはしり、互いに殺しあった。日本崩壊ののち、仙台と福岡に臨時政府が樹立されたが、日本列島全部を掌握することはできなかった」(P43)。また、「すでに壊滅してしまった東京と大阪などは、大オイル・パニックのあと、今度高台の家のあいだで、受風権をめぐる裁判沙汰が起こったりした。裁判所は、それを生存権と認めたものの、混乱と無秩序のなかで殺しあいまで起こり、法が施行されることはなかった」(P42)。これは 1995 年の社会現状である。

3.2.1 原子力発電への賞賛

そうした現状に置かれた坂口は、1984 年のエネルギー危機を前に、「ソフト・エネルギーへの切りかえが、国家目標のようになってしまっ」(P39)て、「ソフト・エネルギー技術は、まだ手の届くところには来ていなかった」(P39)と回想した。また、「巨大技術への不信は、原子力発電所を抹殺した。まったく排気ガスを出さない、クリーンなエネルギーを葬ってしまったツケが、いま廻ってきたことにな」(P39)ったり、「もつとも手の届くところに来ていた原子力のクリーン・エネルギーを、体制・企業=悪という迷信で葬ってしまったツケが、いま廻ってきた」(P45)りするように警告を出した。原子力発電を「クリーンなエネルギー」と見て、原子力発電を廃止したのは、「体制・企業=悪という迷信」に起因したと、坂口は考えている。この状況を悲観する坂口は、「コンクリートの原子炉格納棟は、ほぼ完成して、その脇にタービン建物も出来ているが、原子炉を運びこむまでは到らずに、計画は中断されたままになっている。おれは、ここが好きだった。草ぼうぼうになった敷地内にそそりたつ、コンク

リートの残骸を眺めていると、もし、これが実際に稼動していたら
—という、せめてもの夢にひたることができる」(P40)と、原子力発
電の稼動を、停電が頻繁に起きる現状から脱出する方法として、心
から期待している。

3.2.2 風力発電への批判

原子力発電所が廃墟になった現状に置かれた坂口は、「救世主のよ
うに言われた太陽熱は、せいぜい温水器くらいにしか使えないし、
風力は、たった二個の電球すら点けることもできない」(P34)と言
い、「あっちでもガラガラ、こっちでもガラガラという有様で、建てこ
んだ地域では騒音もばかにならない。(中略)日本のような狭い国で、
各戸それぞれに風車を持ちはじめたら、どうにも統制がとれなくな
る」(P41)と、エネルギー政策が根本的に解決されていない深刻な問
題だと指摘した。「日本経済が瓦解したとき、風車と温水器の省エネ
住宅だけが残ったのである」(P41)と諦めたと同時に、「風車一風の
自然なエネルギーを利用するというソフト・パスには、人間の自然
に対する最良の引きたおしのような憧憬がこめられていた」(P44)
と、原子力発電に反対し、風力発電を主張する勢力を批判している。
と共に「もし、それぞれの家が、勝手に五メートルの大風車をつく
って、自家の電力をまかなうとすれば、とんでもなく生活水準が低
下することを我慢したとして、日本全国で、原発五基あれば充分と
いうことになる。太陽熱などは論外である。波力、地熱も、効率か
らいって問題にならない」(P44)と、風力発電を下位に置き、再び原
子力発電を上位に賞賛する言説を取っている。

3.3 エコクリティシズムによる言説

作品中、エコクリティシズムに関する言説が主に2箇所見られる。
1つは、岡山県北部のダム建設のことで、もう1つは、天竜川の佐
久間ダム開発のことである。

3.3.1 岡山県北部のダム建設

ダム建設地とされた場所は、「特別天然記念物オオサンショウオの
棲息地」(P38)のため、「動物愛護団体」(P38)が反対に乗り出したが、

「動物性蛋白に乏しい地元民に蛋白原として」(P38)食べられても、「生態的なバランスはとれていたらしい」(P38)と、坂口は立論した。ここから見て分かるように、ダム建設と環境保護とは、実は二者択一的に相反することにはならないという語り手の主張が明確に見て取れよう。

3.3.2 天竜川の佐久間ダム開発

坂口はまた水力発電を例に挙げた。「これぐらい自然破壊につながるものはない」(P38)と思った天竜川の佐久間ダム開発は、「膨大な自然を破壊しているし、しかも膨大な工事関係の犠牲者を出している」(P38)と、一見水力発電に非難の矛を向けているように見えるが、本心では「たかだか三十数万キロワットの電力を得たに過ぎない。最新鋭だった原発の三分の一の出力でしかなかった」(P38)と、裏返しに、原発を賞賛している。

3.3.3 エコクリティシズムを逆転させた言説

「石油ダメ、水力ダメ。いったい、どうしたらいいんだ、というぐらいに追いつめられてた電力事情のなか」(P38)、「太陽、風、水、波、地熱」(P39)などの所謂「自然のエネルギー」(P39)、「ソフト・エネルギー」(P39)が全面的にクローズアップされ、原子力発電所を廃炉に追い込んだわけである。しかし、原子力発電所が廃墟になった後、「あたりの家のたたずまいは、十年前とは比べものにならないくらい、貧しいものになっている」(P39)と、経済面から「ソフト・エネルギー」使用を非難している。また、隣りの古川家と「受風権」を巡って争い、「おおかたの日本人は、電気は、あるのが当然と思いきりこんでいた。湯水のように使う—という形容は、まさに日本的である」(P37)と日本人根性を摘発した上、さらに「まったく排気ガスを出さない、クリーンなエネルギーを葬ってしまった」(P39)り、「もっとも手の届くところに来ていた原子力のクリーン・エネルギーを、体制・企業=悪という迷信で葬ってしまった」(P45)りすることによって、「ツケ」が廻ってくるという論理を立てている。エネルギー政策としては、環境保護、経済利益の両方を兼ね備えた「クリーンなエ

エネルギー」としての原子発電を一貫して高く評価している。これは、まさに 90 年代の当時、日本政府が宣伝していた通りの原子力発電の「安全神話」を全面的に肯定した上で、坂口をして語らせた作者の策略である。いわば、3・11 以前には疑おうとしても具体的な被害証拠を挙げて疑うことも出来なかった原子力発電を、最上位に置く作者豊田有恒がエコクリティシズムを逆転させた言説である。

しかし、「隣の風車」から約 30 年後に 3・11 の原発事故が現実になってしまった。そのため、原子力発電に被せられていた「クリーンなエネルギー」のベールは、「原子力の高度に発展した生産力に伴う危険」²⁰に置換され、ウルリヒ・ベックが言った「生物にとって地球を生存不可能な場にする政策が一步一步確実に推し進められている」²¹という、原子力利用の正体が暴露されてしまうことになったのである。作者豊田有恒の言説をポスト 3・11 の現在から見ると、原子力発電は「クリーンなエネルギー」という美化された幻に基づいた一種の話術としか思われぬ。

4. エコクリティシズムによるポスト 3・11 の原発文学作品「不死の島」の分析²²

多和田葉子の「不死の島」は、2012 年に書かれ、日本人の「わたし」(P35)という第 1 人称で語った作品である。作中では具体的に「福島で事故があった」(P14)2011 年から、「二〇一五年、日本からの情報が途絶えてから」(P13)、また「混乱期を経て、二〇一五年に、日本政府は民営化され」(P16)、「二〇一七に太平洋大地震が起こった」(P16)が、「あれから六年経った今も詳細は分からない」(P17)という一連の語りによって、作品で言った「今」は、2017 年から 6 年経った 2023 年のことを指すと思われる。いわば、「不死の島」は 2012

²⁰前掲ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳書 P28

²¹前掲ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳書 P55

²²詳しくは、曾秋桂(2013)「3・11 以後日本文学の振幅—『それでも三月は、また』における「原発」の課題—」『台湾日本語文学学会学報』33 号 P57-82 台湾日本語文学学会を参照されたい。

年の発表時より、11年後の、2023年の未来像を空想し描いた作品になる。

4.1 作品の大筋と語り手

語り手は、「三十年前からドイツに住んでいて」(P12)、「ヨーロッパ共同体のパスポート」(P13)をもらっていない日本人の「わたし」という人物である。物語は、ニューヨークからベルリンの空港に到着し、パスポートの検査を受ける際、「あれから日本へ行ってない」と言うことで我が身の潔白を証明しようとした自分がなさけなかった」(P12)と日本人が直面した現実から始まり、消息が絶えた日本国内の情報を、アメリカ滞在中の2023年の夏にアメリカで出版された、ポルトガル人が書いた『フェルナン・メンデス・ピントの孫の不思議な旅』の本から垣間見ることしか出来ない。その書物によると、「福島で事故があった年」(P14)2011年から「太平洋大地震」(P16)2017年に至るまでの日本国内の様子は、若者に関する「永遠の青春」(P19)と、老人に関する「地獄草紙」(P19)」と言った表現に尽きる。

4.2 「今」の日本の社会—「原発」への批判

「今」の2023年の日本社会では、生きている老人は、「二〇一一年、福島で被爆した当時、百歳を越えていた人たちはみな今も健在し、(中略)百二十歳を越えてもまだぴんぴんしている」(P18)、「死ぬ能力を放射性物質によって奪われてしま」(P18)い、「死ねない」(P18)状況と言われている。それに老人は若者の世話をする責任を負わなければならない。というのは、日本島に生きている若者は、「二〇一一年に子供だった人たちは次々病気になり、働くことができないだけでなく、介護が必要なのだ。何しろ毎日浴びる放射能は微量でも、細胞が活発に分裂していけばあっという間に百倍、千倍に増えてしま」(P18-19)い、「若いという形容詞に若さがあった時代は終わり、若いと言え、立てない、歩けない、眼が見えない、ものが食べられない、しゃべれない」(P19)ということの意味する「永遠の青春」(P19)の状況にあるからである。放射性物質の影響により、

働くべき若者が働けなくなる代わりに、百歳を超えても死ぬことが出来ない老人は社会を支えている。「身を焼きつくす炎や流れる血が目に見えるわけではない。悲しみも苦しみも形にないまま老人たちの心に蓄積していく。いくら一生懸命に介護しても、若い人から順に姿を消していく。未来のことを考える余裕などないうちに、次の大地震が襲ってきた」(P19-20)と言う「地獄草紙」(P19)の現状である。そこで、問題とされたのは、言うまでなく、「放射性物質」からの悪影響である。

4.3 エコクリティシズムによる言説

作中でポルトガル人が書いた『フェルナン・メンデス・ピントの孫の不思議な旅』によると、「放射性物質」の悪影響は、「二〇一一年、福島で被爆した当時」に遡り、2017年の太平洋大地震の時に、「新たに壊れた四つの原子炉から」(P20)漏れた可能性が高いという。「放射性物質」が日本の自然環境を破壊し、それに覆われた日本島で人々が生活している悲惨な様子を次節で詳論しよう。

4.3.1 生活環境の変化によって生じた極端な不便

8月の東京でも日本人の家は「どの家もドアや窓を開けっ放しにしていた」(P20)り、通勤通学には「裸足に草履をはき、手脚の肌を剥ぎ出しにし」(P20)たりしている。「文明人ではないと思われ、植民地化されてしまう危険が出てきそう」(P20)である。

また、放射性物質の影響により、「魚や貝や海藻など海で取れたものを食べる習慣も、海水浴の習慣もなくなり」(P20)、「海の幸は危ないが、きのこや山菜など山の幸も危ない」(P20)と生活環境が変わった中、「東京に住む人たちは土ではなく綿を入れた植木鉢をビルの屋上やベランダに置いて、その中でインゲン豆やトマトを作って食べている」(P20)。

4.3.2 生活環境に伴う娯楽方式と精神の変化

「貸本屋」(P20)再興、「木版ですった瓦版」(P21)の新聞販売、「語り部」(P21)の出現などによって、「デフォルメされた江戸時代」(P21)に、「放射性物質」に覆われた日本島で生活している人々が、「満足

しているわけではない」(P21)。電源不足のため、「夢幻能ゲーム」(P21)が市場で発売されたが、それは「お経を選んでやると、亡霊が成仏して消える」(P21)というゲームだが、「消しても消しても新しい亡霊が姿を現す」ため、「勝つ」という言葉の意味を覚えている人ももうほとんどいなくなってしまった」(P21)のである。

このように、「二〇一一年、福島で被爆した」ことにより、自然環境に深刻な影響を与えた「放射線物質」が、日本社会、日本で生きている人々の生活様式を全て大きく変貌させたのである。「日本」と聞くと二〇一一年には同情されたものだが二〇一七年以降は差別されるようになった」(P12-13)。そこは、長生きすることを喜ぶべきはずの現在の価値体系とは逆に、放射能のため老後を楽しむことなく衰弱した若者の世話をせざるをえない老人が現実耐えつつ

「死ねない」(P18)世界である。危険なはずの「放射線物質」が、人類文明の目標だったはずの「不死」の状態を産み出し、さらに喜べない「不死」を「地獄草紙」に変えるという複数の逆転からは、二度と取り返しの付かない原発事故への嘆息²³、また回復しようのない深刻な状況をもたらした原発への批判がはっきりと読み取れよう。ここでは、エコクリティシズムが輻輳したアイロニーとして機能している。

5. 結論—3・11を境に見る未来像を描いた原発文学作品の対比

本論文では、エコクリティシズムの根幹を為す「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移」、「人間中心主義の解体と環境中心主義」の観点から、3・11以前と以後に原発をめぐる未来像を描いた点では共通している豊田有恒「隣の風車」(1985)と多和田葉子「不死の島」(2012)の両作品を比較対照した。以下、その生態・環境との関係性、及び原発をめぐる作家の文学的関心と実

²³前掲北田幸恵論文 P117 では、「多和田の今回の原発事故への日本の対処に対するきびしい批評と鋭い告発が込められていることはいうまでもないだろう」とある。

践の軌跡について結論を出す。

3・11以前に書かれ、原子力発電(クリーンなエネルギー)から風力発電(ソフト・エネルギー)へ切り替えられた後の悲劇に重点を置いた「隣の風車」では、間違ったエネルギー政策が齎した生活の混乱と衰退した社会経済現状を描いて、原子力発電を放棄した「ツケ」(代価)を全国民が支払う、という仮想世界を描き、原子力発電を推進しなければならない必然性を主張している。作者の豊田有恒は3・11以前『日本の原発技術が世界を救う』(2010年祥伝社)を刊行し、世界に誇る日本の原発技術をアピールしたが、3・11が起きた後でも、原発を支持する立場を少しも変える必要はないと、頑とした姿勢を変えない²⁴。安全よりも経済利益を優先に原発再稼働をめぐる安全審査の議論が続いているが²⁵、自民党石破幹事長が公表した「原発再稼働しないと日本の未来はない」²⁶の発言や、九州電力玄海原発がある佐賀県玄海町長選挙に原発再稼働支持が当選した結果²⁷が原発再稼働の方向へ加速し、エネルギー確保を放置してよいのかと警鐘を打ち鳴らす「隣の風車」に同調したと言える。とはいえ、エコクリティシズムの言説を逆用したクリーンなエネルギー(原子力発電)という賞賛は、ポスト3・11の「安全神話」の崩壊により、逆にエコクリティシズムの言説を利用する手段が暴露され、リスクへの視点はまったく欠けているため、ただの原発肯定イデオロギーの宣撫に終わってしまうと言わざるを得ない。一方、原発事故が起こった3・11以後、原発への批判を描いた「不死の島」は、クリーンなエネルギー(原子力発電)のリスクは取り返しの付かない事態を招くことを、アイロニカルな手法で表現している。

²⁴ 「原発の輸出」田中優氏、豊田有恒氏 MSN産経ニュース 2011年12月9日

²⁵ THE PAGE「<原発再稼働>「10原発17基」の安全審査の現状は？」(2014年5月1日閲覧) <http://thepage.jp/detail/20140402-00000011-wordleaf>

²⁶ フジテレビ系(FNN) 8月5日(火)11時11分配信「自民・石破幹事長、「原発再稼働しないと日本の未来はない」(8月4日夕方兵庫・神戸市での講演内容) <http://headlines.yahoo.co.jp/videonews/fnn?a=20140805-00000941-fnn-pol>(2014年8月5日閲覧)

²⁷ 【電力危機は続く】岸本氏3選示された民意、再稼働に弾み(産経新聞8月5日) <http://headlines.yahoo.co.jp/h1?a=20140805-00000044-san-141>(2014年8月5日閲覧)

両作品の発表年代は大きく異なるが、ただ原発に反対するだけでエネルギー政策問題に対処しないと、「隣りの風車」の世界になり、逆にただ原発に賛成するだけで、リスクへの対処をしないと、「不死の島」になるという循環性が見出せる。両作品を合わせ鏡のように読むと、文明の恩恵を享受する現代社会がエネルギー政策問題を直視して冷静に決断を下す必要性が浮かび上がる。3周年を迎えたポスト3・11の今、ウルリヒ・ベックが出した「危険として捉えているものはまずなによりも、直接は人間が知覚できない放射能」の警告や日本政府が2013年の秋に遂に福島での全員帰還を断念した²⁸ことから見ても、今を生きている地球の人々には、「反原発」・「脱原発」、あるいは「原発支持」を二者択一的態度で捉えずに、より明確にエネルギー政策問題に対処すべき機は、既に熟したと言えよう。

本論文は、東呉大学日本語学科による「2014 日語教学国際会議」(2014.5.3)での口頭発表を修正、加筆したものである。同時に、102年度国科会補助専題研究計画(102-2410-H-032-079-)による研究成果の一部分である。

テキスト

柿谷浩一編(2011.10)『日本原発小説集』水声社

鈴木哲発行(2012.2)『それでも三月は、また』講談社

参考文献

(一)書籍及び機関雑誌

浅井千晶(2010)「『崖の上のポニョ』—海辺の生命の物語—」『千里金蘭大学紀要』7号

ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳(2011・初1998)『危険社

²⁸毎日新聞「政府・与党：福島「全員帰還」断念…困難区域「移住を」
<http://mainichi.jp/feature/20110311/news/20131030ddm001040042000c3.html> 2013年10月30日(2014年3月30日閲覧)

会新しい近代への道』法政大学出版社

加藤貞通(2007)「環境文学入門：自然とのコミュニケーションを回復する」『メディアと文化』第3号

曾秋桂(2013)「3・11以後日本文学の振幅—『それでも三月は、また』における「原発」の課題—」『台湾日本語文学会学報』33号台湾日本語文学会

野田研一(2003)『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社

松岡幸司(2011)「『1842年7月8日日蝕』：翻訳と解説—ネイチャーライティングとしてのシュティフター」『信州大学人文社会科学研究』4号

山里勝己(2005)「書評野田研一著『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社、2003年6月」『英文学研究』81号一般財団法人日本英文学会

(二)インターネット資料

<http://www.asahi.com/articles/ASG2P625TG2PULBJ00Q.html>「朝日新聞デジタル」(2014年3月1日閲覧)

<http://www.asle-japan.org/環境文学用語集/エコロジー-生態学-ecology/>(2014年3月30日閲覧)

<http://www.asle-japan.org/環境文学用語集/エコクリティシズム-環境批評-ecocriticism-environmental-criticism/>(2014年3月30日閲覧)

<http://headlines.yahoo.co.jp/videonews/fnn?a=20140805-00000941-fnn-pol>「自民・石破幹事長、「原発再稼働しないと日本の未来はない」(8月4日夕方兵庫・神戸市での講演内容)(2014年8月5日閲覧)

<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20140805-00000044-san-141>

【電力危機は続く】岸本氏3選示された民意、再稼働に弾み(産経新聞8月5日)(2014年8月5日閲覧)